

昭和二十六年七月二十五日發行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日發行)

(通第一四九号)

# 慈光

第十三卷 第八号

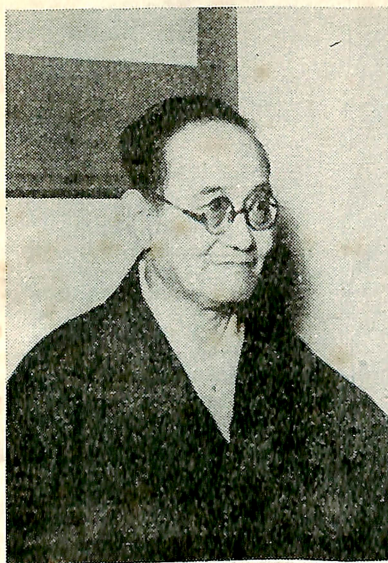
目次	教行信証『信卷』講話 (四)	近角常観 (2)
	隨筆『虎雄と私』	近角真観 (8)
	師の恩	西博 (14)
	あゝ常音先生	柳瀬留治 (16)
	意識『一念多念分別事』	隆寛律師作 (20)

# 近角常音先生の御忌日に

花田正夫

昭和二十八年、八月六日、広島原爆記念の日、先生は七十一歳をもつて往生せられました。本年も求道会館では有縁の方々が、期せずして自然に集まられて、しずかに、なごやかに、しかもおごそかに、伊恵子奥様を中心に、法要がいとなまれ談合もつきないことと、名古屋から遙拝させて頂きます。

思えば、昭和十六年十二月二日に、常観先生が入滅せら



近角常音先生

れましてから、大戦、敗戦、窮乏、混迷の日本の暗黒裡に「国安かれ、仏法ひろまれ」の一念に、烈々火と燃えられたの御念願の中に、身も心も消耗しつくされ、最後の血の一滴をも注ぎこまれてお亡くなりになりました。

「本当にきいてくれる者があれば九州まででも行くよ」とは、心臓病で難渋されていた御晩年のお声でありました。こうした御声は私共の耳の底にあり／＼と刻まれて、そこに無限の力の源泉を被つて居ります。

さて今回は幸にも、常観先生の御次男の真観様や、常音先生の御女婿の西博様、そして柳瀬様の原稿を頂き、先生の八週年の記念号とさせて頂きました。ことに、先生の生きたまことのお言葉を伝えて下さったことは御礼の言葉もありません。先生の御影の前に謹みて御礼を申し上げます。

敬白

# 教行信証「信巻」(四)

御本書はまことに貴き書故、私共が勝手に読むは如何なるも、御開山聖人は覚信尼公に延べ書きを渡されたることがあります。『花園文庫』の中に

「師父聖人の御片身として残しおかれたる広文類の御延書、まことに読む度に身の嬉しき、心の涼しき」

とある。いかにも読む毎に涼しく嬉しくとある故に、意味極りなく深きも、併しながら頂きようでは軽く御文の通り、文面文句の儘が有難きゆえ、よく味えは味うほど、ありがたい。今日は勿論、御文をすらく／＼読まぬと進まぬから読みませう。

顕浄土真実信文類

愚禿親鸞集

文類とは文集であります。皆様は聖教など読み書き抜き集めなさることもありませんが、この様なものと思つてよろしい。併し親鸞聖人の文類は、私共のノートとは違います。御文類ある上はそう理屈言うでなく、信仰の筋道に集め列ねられたるが故に、昔から御引用の文は味わず、解釈に力を入れるも、それでは聖人の御意にかなわぬ。聖人

# 近角常観

の思召は文に重きを置き、御自釈はそれを讃歎をせられたということをお願いしたいと思います。

初めに教行信証と四つに分ち、それに、真仏土、化身土とある。共に六巻であります。その中信の巻は上下ありますが、長いからであります。初めに分本して、それに三経異訳を初めとして、華嚴、涅槃、其他の諸経、論釈、種々のものより引いて書き並べられてある。

法然聖人の『選択集』は恰も一切経を纏めて、三経の外御書きにならぬ。殊に善導一師によりて、一心専念の念仏一つにして、聖道門、戒律等皆棄ててしまひ、唯、南無阿彌陀仏だと云う云い方でありませう。

親鸞聖人はそれが積極になつて、その南無阿彌陀仏を味つて見れば、この経にも、あの経にも、皆南無阿彌陀仏がかように説いてあると仰言るのである。法然聖人の棄てられた御言葉が、親鸞聖人には皆信仰の言葉として現れたのである。即ち南無阿彌陀仏の意味をすべての経に求めて、

一切経をお集めになつた。

歎異抄の十二章に「他力真実の旨をあかせる、もろく／＼の聖教は、本願を信じ念仏を申せば仏になる、そのほか何の学問かは往生の要なるべきや」とある。他力真実の旨をあかせるもろく／＼の聖教とは、即ち教行信証の事である。凡ての聖教、それは何かと云うに、本願を信じ念仏申さば仏になると書いてあるばかりである。

その本願を書いたのが教巻。世に教は多くあれども、皆向上の悟りでその教の通りに吾人は出来ない。出来ない人間のより集りの娑婆だからそれを助けてやろうとの大悲の願力があるとの教こそ、教として真の教である。

法然聖人は聖浄二門のうち聖を捨て、浄土をとられたのである。聖道門と云うのが仮であつて本当ではない

聖道権化の方便に 衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の一乗帰命せよ

かくの如き罪深き者で本当に如何にしても聖道門は出来ぬ「唯仏一道清くまます」、唯仏一道は真実である。この罪深きものは、他の道を捨て、この道をとるというのではなく他の道は無いも同様である。ただこの一道あるのみ。十方三世の諸仏と雖も、この弥陀の本願を説くために現われたるのみである。これは我が法尊して云うのではありませんこの本願を信ずることを書いたのが信の巻、念仏申すの

### 至心信樂の願

教は願から始まります。行は十七願、信は十八願、証は十一願、真仏土は、十二、十三の願。それに二十二の願が還相廻向、皆本願から割出して書かれました。

で親鸞聖人を非常に頭の明晰な方とも云う。これは教行信証を組織的にチャンと綴られてあるから、其眼を以て見れば、皆明晰となる。

又一面親鸞聖人ほど愚かな著述、ボンヤリしたことを書く人は無いと云う者もある。

斯く両方に見る者の評が異なるのは何故であるか。組織と云うも理で切り盛りした組織ではない。真の徹底の信仰上の組織である。本願の上より総てのものが組織出来るのである。又朦朧として居ると云うのは、玉の如き温潤含蓄の信仰だから、仮に分けて云うのみで、渾沌たるものである。学問的に言えば渾沌たるものである。信仰的に総てが頗る要領得て居るので、総てを解決出来るのである。されば信を得たる人を仏は広大勝解者と仰せられる。人生瞬間に夜が明ける。実に要領を得て居ります。信仰は情的なものだ等という考が随分世に行われてある様であるが、此の如き偏頗なつまらぬものではない。智慧の念仏、とも申します。しかし冷やかな理性性ではない。そのすき通れる無分別智の中に無量万徳の味があります。池渾玉の味がありま

が行巻である。

謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。口には南無阿弥陀仏、心には信心、即ち本願を信するなり念仏する行があらわれてくる。仏より与えられたる大行大信である。口に南無阿弥陀仏と称えて信する行、信じて南無阿弥陀仏を称する信、即ち信より行、行より信、皆一つである。甘いと食べたとは離れぬようなものである。

全体教行信証四巻とて別のものではない。信するということも南無阿弥陀仏一つを離れたことではない。念仏というも信心を離れない。四巻とも玉の如きものである。豆腐を四つ並べたように別のものではない。その教行信証、皆まことが主で、本願を信じ念仏を申さば仏になる、念仏成仏是真宗頭浄土真実教行信証。皆真実は法を説き給うのである。その真の仏、真の土を書きましたのが真仏土であります。その真実を知らずして仮に仏になつたり、冥想をやつたりするのが方便化身士である。斯様にして真宗の教が出たのである。

念仏成仏是真宗

万行諸善是假門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ  
教行信証あれども、ここは信の一念のところを書いてあるのである。

す。それは信仰の解らぬ人から見ると朦朧と思わるるのである。

至心とは、誠、信樂は信じ愛すること。欲生は仏のところに生れんと思ふ。即ち至心信樂して我国に生れんと思えと仏より云い下されるのである。誠は私の方でする前に、仏先ずまことと思ふと仰せられる、そのまこと。又そのまことは、私の方でまことにならぬのを観そなわして、仏よりして真ならざるものを見捨てたまわすして、真にしたまうが即ち仏のまことであります。信樂は仏より疑わず、大慈大悲の御心をかけて下さる。欲生とは、こちらより生れんと欲う心のなき者に、生れんと欲えとの願力により、仰せのもとに目がさめるのである。

### 正定聚の機

邪定聚、不定聚に対して正定聚と云うのである。即ちスカツと御慈悲に安心して、初地の菩薩は退転せぬと同じく退転せないことをいうのである。機と云うことは私共の心の状態であります。法は如来の御心。それで正定聚とは決定した人間の機類、至心信樂の願に依て信仰を得たものが正定聚の機であります。

謹んで往相の廻向を按ずるに大信有り。大信心は則ち是れ長生不死の神方。忻淨厭穢の妙術云云。

聖人が教行信証を書き給うに二大綱領がある。「本願を信じ念仏申さば仏になる」これは往生廻向である。仏の境より又我等を哀れと思召して再び人生の林にあらわれる、これ還相の廻向と云うのであります。故に吾等の人生の中に還相の人が現じて下さるのである。煩惱の林に遊んで神通を現じ生死の園に入りて応化を示す。即ち煩惱林中に救いの人來り給う時、苦惱多き処に、其中に縦横に仏の光が現われて下さる、これが還相廻向の利益である。

即ち本願力廻向によつて大会衆の數に入ることを得るは往相の廻向で、既に仏となりたものが迷えるものを救はんとして煩惱の林に現るるを還相の廻向と云うのです。

この娑婆は有漏である、仏土ではない。然し仏の光は充ち満ちて、煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入りて応化を示し、還相廻向の御手廻しは絶えませぬ。

廻向とは此方にあるものを廻らし向けることである。しかし此方で修行して有する処があれば、廻らし向けることも出来るが、悲哉、我等凡夫はとて、此方からやることは出来ぬ、自分の出離生死さえも自分では出来ぬ。久遠劫來迷うて来ているため、如何することも出来ぬ。若し善いことが自分に出来るなら、それを親兄弟なりに、廻らし与えることも出来るが、今云う通り、自分の出離もかなわぬ煩惱ばかりのものである。然らば何処に出離の道があるか

と歎息された。それで私が

「そこである。そのでもがいかぬ、でもじやない。その念仏が如來があなたに称えさせるために、丁度あなたのおやうな、して見ようのない者に下さつたのであります。あなたにはでもだけれども、如來はそれをあなたのためにわざ／＼下さつたのであります」

と聞くなり、あゝそうでありましたかと、直ちに安心して、同時に、過去、現在、未來の罪が胸中に湧き來りて、益々あゝかゝる御慈悲であつたかと、こう気がついたのがこれが御廻向であります。

又小林さんも、どうしたら信心が得られるかと心配しておられました、一夜床に入つて足をのばして御念仏を申せし時、あゝこうして足をのばしたなり、勿体なくもお念仏を申す、この様に心易く称えさせる為に、何も行の出来ぬ浅ましき私をよく知り抜かれて、このお念仏をたまわつた事と氣附くなり、まあ何で、この有難いことが今迄わからなんだと氣づかれたのであります。

此方から何か握らねばならぬ様に思うて居るから何時までたつても安心が出来ぬのであります。念仏でもというて如來をこちらの道具にしようとしたのがそれがでもではなく、丁度そのために下さつたものが、南無阿彌陀仏であります。かように氣づいた時が、何時のまにか、御廻向にあ

自力聖道の菩提心 ころもことばもおよばれず  
常没流轉の凡愚は いかでか發起せしむべき  
如來はよくこれを知り給い、涙をそそぎ、我に向けて御慈悲をめぐらしむけて下さるのである。真宗の肝心は、この往相、還相の二廻向で、他力廻向であります。

一つには往相。

書物について居ると了解ばかりして、廻向とは自分自身に對しての御廻向と適切に感じないからいかぬ。この廻向が戴けぬなどというのは、まだ遅い話であります。直ちにああ間違つて居たと氣附くのであります。仏は一刻も離れず待ちうけ給うのである。処がその親心を頂かぬうちは世の中むつかしく、淋しく、何でも自分でせねばならぬと苦しみが、このお慈悲頂くなり、否頂くというはおそい、やる瀬なく仏は待つて居て下さつたと氣づかして頂くのである。

昨夜も林さんと話しました。六年前から林さんは苦しんで居られましたが、今日聞いてみればまことに有難いばかりである。前には御本願の綱が眼前にぶらさがつてあるがどうしてもそれをつかめぬ。こちらからとりつくのではない。遂に林さんは  
「ではこれから念仏でも称えましよう。もうどうしてみようがない」

ずかつて居るのである。

法然聖人の御弟子に隨蓮房という方がありました。まことに愚かなる人でありました。法然聖人が死なれるとき  
『念仏は義なきを義とし、様なきを様とす。』  
ただ平に念仏すべし

その意味は、たゞ／＼御念仏を称えればよい。ただ平に念仏をせよとの事である。隨蓮房しきりに称えました。人にもそのことを話しました。一寸信心のない念仏に聞えるのであります。それを人に話をすると、その人はそれはおかしい『選撰集』に念仏の行者、必ず三心を具すべしとあると、こざかしく申しました。

隨蓮房、成程と思う。しかし何だか不安ゆえ師について聞きたいと思うも、最早法然聖人は往生後ゆえ、伺うことは出来ぬ。処が幸に夢の御告げがありました。それは蓮池に向つた廊下を通つて参つた所に法然聖人が念仏して居られました。隨蓮房に向われて仰せられるには、汝案じ煩う所があるだろう、と。隨蓮房、如何にもその通りで御座います。実はただ平に念仏すべし、と仰せられたものだから念仏して居りましたが、念仏には三心を具足せねばならぬと人の言われます為に、安心して念仏が出来ませぬ、とお返答申しました。所が、聖人は、この蓮の華を人が梅じや

桜じやと云えば汝は如何。誰が何というてもこれは蓮の華であります。然らばその如く源空が平に念仏すべし、というたればただ平に念仏すればよい、誰が何と言つても間違はないと仰せられた。ここで随蓮房がいかにもつまらぬ道へふみ迷うたものであります、蓮の花は蓮の花であります、如来が十方の衆生念仏すべしと仰せられたれば、その通り深く安心して喜ぶばかりであります。

これを『歎異鈔』に比べますと

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よきひとの仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり。

と同じであります。信心というて他にあるのではありません。法然聖人は本願のみを説かれ、随蓮房はただハイと其通り称えられた「よき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり」信じたのが信心である。信心を得ようと思つて居る間は自力であつて、念仏で助けると仰言るまます信ずるのが信仰であります。

大信心は則これ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術

聖人は何時もかくの如く繰り返した云い方をせられました『信巻』の下にも同様に繰り返された書き振りがあります長生不死の神方、と云うは一寸突飛な様なれど、曇鸞大師が病にかゝられて、仙術を学んでそれで長生不死の法を得

其他、十二嘆、一々味がある。選取廻向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心、不壞は再び破れぬ。自力をさしはさむから易往無人である。世間難信の捷徑、と云うは余り尊いから自力では信ぜられぬ。それを他力不思議の御力あればこそ信ずることが出来るのである。それ故捷徑と云うのである。信の一念に一時にわかるから、極速円融

## 隨筆 虎雄と私

(編者註) 八月の常音先生の御忌月をお迎え申すにつき、三菱芦別礦業所発行の「あしべつ誌」に所載されていた本原稿を慈光誌へ転載のことを真観様にお依頼しました時、左記の通りの有難い御返事を頂きましたので、誌させて頂きます。

……拙文を以て「慈光」を汚すこと、恐れを存ずる次第であります、常音師忌月号にとの御氣持に沿ひうるならば、御はからいにまかせて頂きます。

「念仏とは、仏を食うことだよ。

何も食えなくて、飢えに悩んでいる君に、これを食べよと差出された念仏。仏を食うことなんだよ」と、示された叔父の氣持が、晩年になつておぼろげながら頂ける

ようとせられた。処が道で菩提流支にあわれて、この念仏の方こそ長生不死の神方と云われたので、始めて氣づいて安心した。そのことが論註にも出て居ります。それから長生不死の神方ということが出て来たのであります。

聖人が磯長の御廟に詣でられた時、二十九歳で命が終るとの御告げをうけられましたのも、これと同様で、丁度その年に法然聖人に詣りて安心して、即得往生、即ち前念命終、後念即生の大信心を得られました。十九歳の時の御告げが丁度合いました。親鸞聖人は曇鸞大師を理想として居られましたから、名まで親鸞とつけられました

又忻淨厭穢とは、信仰を得るときに、この娑婆を厭うの極樂へ行きたいのと云うことはありません。とかく多くの人は信仰前にかく思うと思つて居る。これはあやまりである、そんなことは決してありません。

聖人は自利真實、自力ではこれが先である。聖道門には厭離を先とす、で、淨土門自力に於いては、彼の仏を慕うことである。処で他力に於いては仏を慕うの何のと云う処の私ではない。まことに不実極まる我等を助けんとの仏の真實をきく一念である。結果としてはそれらも出てきますが、先ず仏より真實を聞かしめらるるが第一である。

で一時に解けるのである。真如一実と云うは、仏の境界、皆念仏一つに封じこめて与え給うのであります。

(補) 前月号の「善鸞上人勘当云々」に関しましては、信界建現誌三十三号に「弟子一人も持たずと仰せらるる聖人に義絶とか勘当があるはずがない」と詳細に「信断」を下されております。編集者

## 近角真觀

次第です。

「粥を喰べる」、「手織を着る」。絶対無碍の御真實を頂くことを忘れ、雑毒の善、虚仮の行のみに明け暮れる日常、捨身飢虎と養われている、極善最上の御真實に浴しながら、それを軽いことと考えている明け暮れに下された鉄錫!

如何にも御慈悲一筋に生き且つ死んだ叔父の本願が響く心地が致します。

私もオコガマシクも「去るも極樂、残るも極樂」等と揚言して礦業所の人員整理のことにあたりましたが、畢竟、具縛の凡夫、屠沽の下類の生業。「聖道の慈悲」の「助け送ることきわめてありがたき」ことを知らしめられ、世間虚仮の荒涼たる心をあわ

れみ給う慈光を、我人共に、唯仏是真と仰ぐばかりであります。聖人の悲歎述懐御和讃の尊さを、骨身に徹して感じさせて頂きました。……

昭和三十年六月末日 真 観

## 本文

虎雄？と云つても、大方の各位にはお判りあるまい。トラ、ほら所長（芦別鉱業所）が毎朝ひつぱられてフラフラと散歩さして貰つて御自慢のアイヌ犬よ……と云えば早起きの人はハハーン、あれが虎雄か……と合点が行くはずである。

昨年夏、芦別勤務を命ぜられ、大行李、小行李をまとめて、再度北海道へと「前へ進め」をするとき、中三の長女は親戚にあずけるとして、中一の長男、小一の末娘を連れて隊列に参加させることが、我等の一事業であつた。そして「ラツシイー」を飼つて呉れば学校が替つてもいいと云うことに相成つたわけ。……処が……コリーとなると大変である。ちよつとした小犬が一万円、ドキリときた。犬など簡単に拾えて残飯で育つとキメていた私は、ミルクだ、肉だ、パンだ、注射だと聞くだけでカツと相成り、美唄の知人の話を渡りに船とばかり、生後三ヶ月の「虎雄」に大まい三〇〇〇円を投じて即日我家に持参した。似

を見て責め立てるのであつた。

アイヌ犬の主は人も知る伝法貫一オヤジである。天然記然物北海道犬保存会芦別支部の展示会に、オヤジ来ると聞いて出品を志したのは、それでも息子の思いを忘れかねたセイであろう。笑われてもいい、問題はモノになるか、ならぬか……と独言しながら、セメてもの化粧と久方ぶりで金グシを入ると抜けるわ、抜けるわ、洋服一着分位の毛は充分に抜けたと思う。

忘れもしない、五月十三日、はじめて見る伝法オヤジは恐る恐る「虎」を引き歩く私をジロリと見て「タマワク」「この犬はいま毛の抜け替り時で、ポロを着て出て来ましたが、それに運動不足でしょう、肥り過ぎていますが、血統はいいし、骨組もしつかりしているからナマケズに育てれば、この特良一席の犬よりヨクなること請合です」と強く飼主の奮起をうながし、幼犬牝部の特良二席を賜つた。今度こそ本当に、ヨシヤ!!である。賞品は早速札幌の息子のもとに送り届けた。

血統書を見直せば、父系牝に力（長井氏）太刀（吉田氏）カツサ（鈴木氏）ソラチ（須佐氏）。牝にハルモ（十三中野）メリ（田村氏）あり、母系牝に凶嶺（比原

でも似つかぬ変てこりんな小犬に、息子はハナをならし、娘はベソをかいたが、もはや手おくれである。

鼻をならした息子が夢中になり、ベソをかいた娘が、トラ、トラ、と兄貴のあとを追かけ廻すのを見て、ニタリとしたのは翌朝のこと。

乳臭いお前が娘の手に合わなくなり、息子がジャンパーと学帽と手袋を毎日のようにムチャクチャにされて女房に「ナリ続けられる頃ともなれば、完全に家族の一員である朝は虎」に明け、夜は虎」に暮れる。女房はオヤジのベントーを忘れても虎」のエサは忘れない。

一冬越して今年の四月、息子は志を立てて、札幌に転校した。虎」と別れるのが一番辛かつたらしい。

顔を合せぬように、ヒツソリ家を出てから汽車の中で、母親にエサをやり過ぎぬよりにと厳かに訓戒をたれた後、「お父ちやまに出来るだけ運動させるように云つてね」とヌカした由、シュンときた。

ヨシヤ!!とばかり張り切つたのは束の間……やがて虎」はムクムクと肥り始め、汚れた綿毛を身体一杯につけ、私の顔を見るたびに前肢高く金網に立ち上り、後肢でピョンピョン跳ねながら連れ出せ、連れ出せと珍妙な踊り

氏）牝に太刀女（長井氏）ありで、相当な家柄らしい。千歳系の流れを引く移動型の典型「メリオ号」から発して、戦中戦後二十五年、乏しい食糧の中を粒々辛苦、犬キチ先輩連に純血を保護蕃殖されて、堂々岩見沢系として定着した正統直系の嫡男でありしよなお前は、とばかり改めて赤毛の「虎」を見直したのである。

欲も出たのであろう、それから六時起床、一時間一時間半を虎」と歩く。ウチの杜宅街だけでは満足出来ず、川を渡つて明治壱から遠く、湖畔亭までのす始末。毛も抜け替り剛毛にツヤが出て来る。「体軀均衡を得てよく乾燥し、骨格は緊密、筋けんは強靱でたくましい」趣が出てくる。よく緊つた耳をキリ／＼と立て、太い左巻尾をサツと上げて、前肢を充分に軽くのぼし、後脚を深く踏みこんで全身を送り出す歩容は「軽快で弾力がある」気がする。ことに群犬が吠えかかる中を暗褐色の三角眼に気魄をこめ、黒い唇を直一文字に引きしめて、英気サツソウノと通り抜ける時は「かん威充分にして、然も堂々」と、沈静豪雄……わが子ながらもあつばれなりとばかり、ともに市街をカツポする親馬鹿ぶりであつた。

その頃である。一大事件が勃発した。

その日は平素より一時間も早く、朝五時というのに

虎々をつれ出し、空知川を渡り、小高い山に登つて綱を放した。「逃げるんじゃないぞ」と頬を叩きながら、四回繰返して放すのが慣例。

目を光らし、毛を逆立て、鼻をならしてヤブに首をつつこみ、穴を掘つて大興奮である。

布を見つけて出して、ぐわえて振り廻し、オヤジの前にボールと抛り上げて、気を引き、手を出すとサーツと横飛びに奪つて、襲歩で駆けまわる。取れたら取つて見いである知らん振りをしてるとドーンと身体をぶつけて来る。

球投げによるジャンプ数回、飛び上りざま身体をひねつてワンバンドでクワえるのが得意。

親子共に軽く汗ばみ、意気揚々と市街に下つたまではいい。その時、悪相の大きなシエパードが、原木山積の間からそりとこつちによつて来る。

つないでない強敵は、はじめてだが、見れば首を垂れ、尾をたれた低姿勢である。図体はデカイが、何程のことやあらん、グイグイと突つこむ虎々の力にまかせて前に出たトタン、物も云わずシツポにガブリと来た、飛び込んで相手のツラを殴る。あとは三ツ巴のスクラムに土煙りが上つてグワーンと云つた感じ、蹴る、組む、かむの大騒ぎに子供達の悲鳴、前の家から主人が飛び出し、丸タン棒でシ

からも、次第に腹がたつて来るのをどうしようもなかつた

飼主としては、我が愛犬が山に入り熊に立向つては、阿加号、阿久号の様に勇猛でありたいと願う。また内に在つては、太刀号、刀号の様に典型美を謳われる武者であれかしと望む。これは自然の情であろうが、残念ながら我が子「虎雄」は、之等第一級の先輩連に比べると、可成り隔りがある様だ。

然し親の愛情は、第三者の付けてくれる点数の上下とは無関係である。否、片輪の子程可愛いのである。虎々と兎暴犬相手に同生共死の斗争を演じた後、双方の相寄せ魂は、ぐーんと密着してしまつたと云えよう。

「他人のフリ見て我がフリ直せ」と云うが、私にとつては虎々のフリ見て「我がフリ」を知らされることが多い。牝を慕つて終夜遠吠に身をもだえる彼の姿は、青春の日の我が姿にピッタリである。

猫を見ては、毛を逆立て、目の色変え、狂者の相を呈してオヤジの制止、叱責もあらばこそ、剛情執ように追跡して止まない。以て獣獵犬の本能の血の濃さを知るべきである。

人糞に異常の興味を示すのも、能狩りに入山して饑餓に

タタカ兎暴犬をブン殴る。キャンと云つて首輪をスリ抜け逃げ出したのは虎々の方……。

シエパードは、うなり乍らシブシブのつそりとひき返す。立上つて服の泥をはたき、指から噴き出る血を吸い乍ら「こんな筈しやなかつた。こんな筈しやなかつた」の思いに首を振る私に、

「旦那、あの犬はケンカ犬だ。ウカウカすると殺されますぞ」とご主人の声がかかつた。首スジからポタポタ冷汗が流れる。

首輪と綱をブラ下げて「虎ノ虎ノ」と走り叫んだがいよいよ、ウチに帰つたな……オヤジを捨てて帰るハ何タルコトとばかり気負つて帰つて見れば居ない、居ない!! すぐさま<sup>ちゅうくら</sup>宙を睨んで市街に駆け戻る。

取も外聞もあらばこそ、道行く人、相手かまわず「茶色のアイヌ犬見ませんでしたか」、トーラ、トーラの連呼。揚句のはて遙か川端沿の庭木に、ナワでつながられ、床下にもぐりこんでおびえ切つて居るお前を発見した。

今迄の御自慢はどこへやら「熊にかかつて行こうというアイヌ犬じゃあねえのか、この意気地なし!!」ケガは尻だけと見極め、家に連れかえる途中、小犬がシツポを振つて近付いて来ても必死で逃げ様とする虎雄をアワレと眺めな

堪え、僅かに一日一回、主人の脱糞を至上の食糧として、舌鼓をうつた父祖の味覚を受け継いだものであろうか。

これ等は、意馬心猿、名聞利養に迷惑する煩惱具足、業報深重の我身の映像とも感ぜられ虎々をアワレと思ふ私の気持そのまま、……否その気持の数十層倍の御慈悲が我に向つて注がれて居るとの御教えの程も思われて、思わず知らずお念仏も出て来る次第である。

運動をさせねば虎々はよくならない。運動をさすためには、早起させねばならぬ。早起きの為には早寝が必要。はじめは子供等の為に仕方なしに買ったお前ではあるが、次には第一級のアイヌ犬に仕立て度いとの欲目から、更に転じては、持つて居るだけのものは伸ばしてやりたいの親心と相なり、結果として、オヤジの体質改善、体位向上の恩犬とは相なつた。

彼の快便快食は、私の快便快食であり、われの身心爽快は彼の強靱軽捷をもたらず。

アイヌの伝説によれば、熊はアイヌ人の信する神、アベ、ブチ、カムイ（火の女神）が下界に贈りものとして肉や毛皮を運んで来た使者であり、犬はこれをお迎えする役目をもつているものとされている由である。

虎雄に馴染めば馴染むほど、アイヌ犬の本領が、先祖伝来の獣獵犬としての血統にあることを知らしめられる。

伝法貫一オヤジは云う

「見ていいものは、使つてもいいもの……。型は勿論だが、貴重なものは、その中に流れている血液だ。従つてアイヌ犬の飼育も、鍛錬も、蕃殖も、その本領に即して行われねばならない」

と、けだし至言である。

私は毎日虎雄を通じて身心の幸せをつかみながらも、誰か虎雄の本領に即して彼を熊狩りに連れて行つて呉れる良師が居ないかと探している。熊の爪に腹を割かれ、熊の掌に腰をくだかれることにならうとも、アベ、ブチ、カムイに荒爾として迎えられる榮光が、彼の上に輝くであろう。その時、彼はその本領に即して生き抜いた幸せをシカつかむことが出来るのだ。

私は不束な飼主ではあるが、その日の為の役立ちを夢見ながら、今日も早朝零下十五度の雪をギシギシ踏みしめながら彼と共に楽しい散歩を試みよう。

又私は今、虎雄のヨメさんを探している。虎雄が仮りに二級の上であろうが、一級の下であろうが、彼によりよきヨメをめあわせることによつて、彼の受け継いだ血筋は、更に向上純化せられる。

## 師の恩

一句一言も申すものは、

我れと思つて物を申すなり——蓮如上人御聞書

今生にありがたい善知識であり、追慕やみがたい慈父であつた近角常音師が逝去されて、はや八年の歳月を経ました。その間、うき世の業に、あくせく余念のない私であります。あの慈愛にみちたおもかげは、喉に生き／＼とやきつけられ、あのしづい、特有な声は、耳の底にはつきりと聞えております。

私は幼少より複雑な家庭に育ち、成人するまで一日としてさびしい思いを捨てた事はありませんでした。父と御縁を得てからは、一切の苦勞を共にになつて頂き、よいにつけ、悪いにつけ、その指導のままに処生して行くようになり、すつかり気持も明るくなりました。

ところが戦時戦後の心勞と過勞の故でありましたようか、三十五才の四月、異常な疲勞感をおぼえたのはじめて、ついに肺結核に罹り、その年の暮と翌年の二回にわたつて胸廓成形術を受けましたが、はか／＼しくなく、その間復雑した家庭の事情も加わり、これまでの幸福への願も努力

兇暴犬におびえ切つた虎雄も、成犬に近付くにつれ闘魂たくましく再成長し、過日も鎖をスリ抜けて終日脱走、目の下と口吻に名譽の負傷を受け、雑犬二匹を引卒、夕刻意氣揚々と我家に引揚げて来るに至つた。

大方の各位よ、志あらば、我が探し物をかなえてよ！

「虎雄と私」星の教程ある犬達の中で、また彼の教程ある人間達の中で、奇しくも馴染合つた「お前と私」。それは私に宿縁の尊ぶべきことを教えてくれた。

業報強盛なるが故に、慈愛またいよいよ広大ならざるを得ぬ所以を教えてください。

そして更に私が、私の本領に即し、いばらを分けて前進を続ける勇氣と体力とを与えてくれたのである。

昭和廿六年二月一日 (完)

## 西博

も苦しむも喜びも、一場の夢の如く、これからの生活の問題、亡くなつたあとの妻子の苦勞、それにもまして、現に自分自身生死の関頭に直面して見ると、空々漠々として頼みとするものが何一つないことが分り、居ても立つてもおれぬ、焦燥とも、絶望とも、怨恨とも、後悔とも、虚脱とも、寂寞とも、無常とも、名状することの出ない精神上の行きつまりに陥つてしまつたのであります。

もとより父は発病以来大変な心痛で、病状の一進一退につけ、かえつてこちらが申しわけないほど、心配していてくれましたが、このようにあせり出したにつけ、何とかして御仏の御慈悲をとどけたいとの願いで、老体をはるばる鶴沼の病床まで運び熱心に説いてくれました。そしてわがらぬ私にこやかに「今にわかるよ」と言つて帰られるのが常でありました。帰られた後も歎異鈔や御一代聞書に分らぬままに読んでおりましたが、一旦陰性になつた菌が再び陽性となり、暗怛たる思いにとざされていた頃、八月の



初でありましたが、御一代聞書を読んでる中に、どうい  
う文章によつてでありますか、はつきりしないのでありま  
すが、ふつと気が楽になり、今までの心の苦しみが雲散  
霧消し身が軽々となり、天井が開いたといひますか、底が  
抜けたと申しますか、世の中が何となく明るくなり、囲り  
の事物の色彩が生きてゝとして眼にうつり、物がありのま  
まに躍動し、あるべくしてある事が明瞭に感得されました  
又それまで一応既に得た知識で文字は読め、頭で理解して  
いた歎異鈔も聞書も躍如として明々白々に心読され、読み  
進むのもどかしい位な心地がしました。

こうして今日まで過して来たことの凡ての目算がはずれ  
行きつまつてみると、物事は自分のはからいのように都合  
よくばかりは運ばぬものであり、その運ばぬことをさかし  
らにはからい小細工している自分というものが、どれほど  
先を見通す力があり、どれだけ是非善悪をわかまえる智慧  
を備えているかということ、自分の愚かさのほど、自分の  
罪のほども幾分知らされて来、又奇妙なことに善きにつけ  
悪るきにつけ、囲りの人々の心情行動も幾分察知され、成程  
と了解されるような気がしました。

今は父の来られるのが待ち遠しいばかりでありました。

八月三十一日、相変らずの温顔で、枕頭に下カリと坐られ  
た父は、懇切に説いて下さいました。(くわしく書く暇は

思いました。

思わぬ病氣によつて助骨を六本まで失いましたが、得が  
たい宝を賜つたものと、八年前を回顧して感慨深いものが

## ああ常音先生

常音先生が亡くなられて八年でしようか、暑い八月を迎  
えました。何か耳底録でも書けとのことですが、私のこう  
して生きてること全体、信仰は言うに及ばず、心のこと  
体の健康、生活一切、先生の賜物なので、それは余りに深く  
大きな賜り物で一寸書き様がありません。

信仰に迷つていた長い間、夙も夜も自分の心の闇さばかり  
いじくり、信仰の判らぬことを嘆いていましたが、自分の  
心はどうもこうもならぬ、それだから憐れで捨てられぬの  
だ、との仏のお呼びかけ、私に何の縁もない赤の他人であ  
る仏に、目をかけられ声をかけられた。この不思議の慈悲  
に抱き取られました以来、横着極る話ですが、自分の心が  
どうのこうのという自己批判などくだらぬことが判り、も  
うしなくなりしました。吾が身全体が炭団でつついて出るも  
のは黒い粉、いじつて果しのないもの、それについて離れ  
給わぬ仏の火、それだけが唯一の光なんです。炭団の一切

ないので残念ですが)

私は地獄といひ極楽というも如何なるところか知りませ  
んが、「此の機このままでは必ず地獄に墮ちねばならぬ」  
と言われた瞬間、思わず涙がほとばしり出て、その言葉が  
そのまま自分のこととして心肝に徹した思ひでした。最低  
下の底の底に落ち着いた思ひでした。これでもう行きつく  
ところに行きついてしまい、すつかりけりがついた感じだ  
りました故、私は、「画竜点睛を得た思ひです」と申し  
ましたところ、父はすかさず「積年のつかえた泥をすつか  
り吐き出したようなものだ」といわれました。これでもう  
すつかりとどめをさされ、参つて頭を下げ、大地へへたば  
つてしまつたような、又は熱み切つた大きな腫れ物をぶす  
つと一挙に切開して血膿をしぼり出してしまつたような安  
らぎをおぼえました。

私はそれまでに聖教を読むというほど読んでもなく、講  
話を数多く身を入れて聞いたというほどでもなく、むづか  
しい教理を知っているわけでもなく、まことに智眼くらく  
鈍根の者であります、何たる御恩でありましようか。  
ひとえに父であり、師である善知識の御導きと、ただあり  
がたく感謝しております。

その夜、帰京される父の後姿を何時までも見送つてい  
る時、その背後に後光のさしているのをこの眼で見たと

あります。

を仏に打ち任せ、賜つた念仏一つで生きています。  
いや、信仰信仰というていたそれを忘れて生活に打ち込  
めて来ました。即ち心をいじくり信仰をいじくつたりせず  
本當の凡夫になつて生きられ救われました。そうでなけれ  
ば既に気が狂つて死んでいたことでしょう。

我々は毎日空気の呼吸しながら尊い空気を忘れてい  
る。常音先生は、「信仰は仏の方のお仕事だ、ただ念仏の粥を  
吸つて生きよ」と仰言つた。常音先生に授つた念仏を呼吸  
し、それも呼吸して生きていることを全く忘れて呼吸して  
います。それで常音先生は私にとつて空気で、無尺蔵で

無対価で、無償で、感謝も何物も求められませぬ。この方  
にあるもの全部が炭団です。それを見抜いての丸貫いの念  
仏、それが空気なのです。私はその後実に四十幾年先生に  
賜つた大氣に包まれ生かされて来ました。余りに大きく深  
いのでお礼の申し様もなく、書き表しようもないのです。

## 柳 瀬 留 治

先生にそしたお礼を申しても、彼土の先生はにこにこ笑つていられることでしょう。やり損ねをいつてもそうでしただから空気のような尊さを感じるのです。いつか、自分の炭団を判らせて頂き、火を点けて下された大きな御苦勞を謝した時、先生は「あの永い七年の間わしも苦勞したよ。夜ねむい目をこすりながら話し、しまいに夜が白み、私にどうも判りません、と君に言われた時がつかりしたよ」と仰言り、本当によくも呆れずに説いて下されたみ心に頭を垂れたことでした。

嘗てよく信者の仲間がいつたことでした。常観先生が吾々に放たれる信仰の弾丸が巨砲のようで、金城鉄壁を守る我々の妄念を一挙にぶち破られる。常音先生は我々のかくし持つている心の隅々を貫かれる機関銃のようなど言つたことがある。大先生の闇をぶち破り光を与えられる行き方が折伏なら、常音先生は飽くまで撰受だと思ふことでした。如何に汚く醜いものを出しても、之を受け入れ迎え取り、「それだから仏が見捨てられぬのでないか」と仰言る先生のよく話される有名な言葉ですが、嘗てのこと、先生が信仰上で行き悩みを感じられ、とても自分は駄目だ、兄にはついて行けぬ、兄をけがすのみである。一層兄と離るべきだと思ひ、鬱々として晴れない心でいられた。その様子を御覧になつた常観先生は、「お前此頃どうしたのか」

単に子に対しての愛といつたものだけでなく、一人一人がやがて世間の風に曝されて心の燈火の明滅ごとに喜び悲しまれることもある。心の燈火の明るい時も暗く悲しい時も常にみそなわし憐み照し給う念仏の光一つ、これは私のあなた方に対する慈愛の奥の大きな源をなす念仏なのだ、という不言の慈愛だつたと思ふのです。あの大きく深いお

父の

上心力が皆さんの上を照らし見守つて下される、それが皆様の心に届いてのことだと存じます。人間の儂い愛を越えたお父上の大きな遺産だと思ふんです。と申したことでした。皆さんもそれを深く感じていられる御様子を見て感慨無量でした。常々お子さん方に取り立てて信仰を説かれることもなかつたようですが、常に身を以て仏の撰取のみ心をもち見守つていられたことでした。

又それがお子さんに対してだけでなく、我々が等しく蒙つたことでした。我々の生活中の一喜一憂を共に喜び共に悲しんで下されたことです。先生は大変に聰明でこまやかであつて、吾々の顔見ただけで凡てを知りぬいて下された。だから先生の前にはどんな醜いことも汚いこともさらけ出してお話し出来たことでした。それがよいこと悪いこと、生活全般を受け入れ見守つて下されるのでした。忘れもせぬが、私が若く陸軍に勤めていて半額乗車証を人にくられて

と聞かれた由で、常音先生は有りようを話された処、

「またやりそこない／＼それだからお呆れないお慈悲でないか」と仰言る。その一語が先生の心身に徹到し滯つていた心水が全身に堰を切つて溢れ、やりそこないしている者をお呆れもお呆れないお慈悲かと感泣されたとのこと。そのことは先生の晩年感涙を以て語られるところでした。人間がどうやりそこねをし、どう迷ひ、どう間違つても、それを慈みお呆れない仏でまします。この深い信仰の上から、我々の妄執を開いて下されたことでした。どんな醜い心を持つていても受入れ撰受して、いかにもそうであろう、それだから仏が哀れで見えておれないのである。と大らかな慈しみをもつて、持ち物の凡てを包み取つて下さるのでした我々のよいと思つてやや自慢顔のことも又悪くて困つていれることも、先生の眼からは何れも等しく人間の憐れな思ひで、共に憐い心の燈火の明滅でしかなく、それに一喜一憂している我々全体を慈しみ、広く和やかなお心で、にこにこし乍ら聞き取つて下されるのでした。

それがお子様方に対しての愛育も同じであつた。昨年の元日だつたか、お宅へ年始にいつた処、お子様達が皆来ていられた。そしてお父上の思ひ出を話していられた。その時私も申したことでした。お父上は随分皆様一人一人の性格を御覧になり、お慈しみになつたことでした。

やり、途中バレて刑に処せられるかも知れないという時でした。「愈々そうなればわしが身柄を貰い受けに行こうと言つていた所だよ」とのことでした。又私は直腸周囲膿瘍に罹り四十度の熱が十日も続き生死の間にいた時も親身になつて御心配下された。入院し肛門を丁字形に切り開き、さいわい治つた。先生の処へ御礼に行き「先生お蔭様で治りました。でも肛門が開つ放しです。見て下さいませんか」と申すと「うむ見よう」と仰言るんです。私は四つ道いになり先生に肛門を向けると、先生が肛門を覗いて「おお中の直腸が見えるよ」と仰言つた。先生は人間の凡てを御存じて穢い所も構わず見て下されるのです。まだいろんな方のそうした裏の裏まで心配し相談に乗つて下されたことを洩れ承つてゐる。或る篤信の青年です。女を買つて淋毒かを感染した為、その包茎の手術をした。処が尿道が破れ尿が棹の裏から洩れるという。その善後策に骨を折られた話を聞き又女から梅毒を受けて困つてゐるのを憂いて医者に連れて行かれたことも聞いた。

先生はただ信仰の一事だけでなく、そうした人々の体のことと生活のことまで心配され、親からその打開に乗り出して下されるのでした。私がまだ青年の頃信仰に迷うて寒中羽織もなく先生の所へ行つた。「この着古しの羽織だが」といつて私に下されたこともあつた。信仰も判らず御厄介は

かりかけている私に先生から頂く筋はないのです。思えばそれ一つでも私の不思議のお慈悲を身を以て示して下される先生でした。

常観先生は表玄関の客間で断乎として信仰をお説き下されるとすれば、常音先生は裏々から招き入れて居間で身の上を聞いて下されるといった風でした。この表と裏、父となり母となつて我々の信仰開發に一生を投じて下された両先生でした。先生なき今日猶も有縁より有縁へと先生の説かれる「お呆れないお慈悲」が燎原の火のように方々に燃え移り或は熾りを発していることが思われます。

常音先生が死の直前に「死ぬのか、死ぬのは厭だなあ」と仰言つたそうです。先生は誠に凡夫の本音を吐いて下された。我々は常に頭では当然死ぬと思ひ乍ら、今こう生きているそれが、いつまでも常住のような気がしてどうにもならない。これは自我執着でしょう。執着の切れないまま死ぬのです。「死ぬのか、厭だなあ」と仰言つて先生が死なれ、橋地翁も「人事じやない。私が今死なねばならぬのだ、自分が死ぬとなると全く辛い」と仰言つたとか、友人の柴崎も頻りに「無だ、虚無だ」と書いています。近くは葦原雅亮師も死なれた。

無常ということは概念でなく、自分のことになると大問題です。世の何もかも儂く力になるものはない。

### 意譯「一念多念分別事」

念仏の行について、一念でよいとか、多念でなければいけないとか、互にあらそうているということが、この頃しきりに聞こえる。これは非常に大切なことで、よくよくつしまねばならない。

或は一念を主張して多念をきらい、或は多念を主張して一念をそしつている。どちらも、弥陀の本願の意趣にそむいており、また善導大師の經釈を無視した主張である。

多念はとりもおさず、一念の自然につもつたものである。そのわけは、人のいのちは、一日一日を今日がかぎりとおもひ、時々刻々に、只今が終りかと思つて、油断してはならない。火宅無常の世界は、よしや生を受けてもやがてはかない、ただ仮りの住処であるから、風前の灯火、草上の露にもたとえられて、呼吸がとまり、いのちの絶えることは、賢者も愚者も誰一人としてのがれるすべはない。

このように無常迅速の世であるから、只今にも眼が閉じてしまうならば、弥陀仏の本願の不思議な御力で、御浄土へまいらせて頂けるのだと信じて、南無阿弥陀仏と称える一念に、①無上の功德をたまわり、②広大な利益をこうむ

先生が「死ぬのが厭だなあ」と仰言りやがて口をもごもごさせて息を引き取られたとのこと。それが念仏だつたとのこと。念仏は先生の遺産です。聖人はじめ唯念仏一つで生き、仏一つで生き、又息を引き取られたことです。

### 歌集「霜髪」より

柳瀬留治

青海原に波たつが見ゆ年あまり海も見ずて生きなづみ

生計

泥沼のたつきになづむ面あげて今日は眺めむあをき

海原

しほたれて滅入れる心海に向け穩にさびしくいたはり  
てあり

泥にひちて重かる我にかかはらぬ世界かも海青く広  
らに

でで虫よ這ひ出でて海の広きを見よとけふ空穗会伊豆  
山の湯に

### 隆寛律師作

るのである

(註一) 五法悪世の有情の選擇本願信すれば、不可称不可説不可思議の功德は行者の身にみたり。(和讃)

(註二) 弥陀の本願信すべし本願信するひとはみな、撰取不捨の利益ゆえ、等正覚にいたるなり。(和讃)

ところが、このいのちがのびて行くにつれて、この一念が、二念、三念となつてゆく。この一念がこのようにかさなり積れば、一時にもなり、二時にもなり、一日にも二日にも、月にもなり、一年にも二年にもなり、十年、二十年にも、八十年にもなつてゆくことであるから、顧みれば、ようこそ今日まで生命があつたことである、まことに不思議というほかはない。それにつけても、只今も、この世の終りになるかもしれぬと、油断なく身をかえりみて、念仏申すのが、往生一定した人の信仰生活の有様であるから、善導大師は「往生礼讃」に

恒願一切臨終時

浄土を願うあらゆる人々は、いのちの終る時まで、折にふれては恒に、

勝縁勝境悉現前

仏をも光をも拝み、香をも嗅ぎ、善友の勧めをうけようと願え。

とねがわしめて、念々に忘れず、念々におこたらず、まさしく往來の素懷そかいを遂げるその時まで、念仏すべき所以ゆゑんをねんごろにお勧め下さつてゐるのである。

もとより、一念をはなれた多念もなく、多念をはなれた一念もないのに、ひとえに多念でなければならぬと定めてしまうのでは、『無量寿經』の中に、或ところでは

諸有衆生 十方のよろずの衆生

聞其名号 本願の名号を聞いてうたがひなく、

信心歡喜 あゝ有難い、おたすけ頂けることよと

乃至一念 おもうこころのおこる一念に、

至心廻向 仏の眞実の御廻向として、本願の名号の

願生彼国 不思議な功德を頂き、

即得往生 かの安樂國に生れようと願えば、

時を経ず、日をも隔てず、無碍光仏の御

心のうちにおさめとられて、

住不退転 必ず往生出来る身に定められて、退転することのない位につかせて下さる。

と説かれてあり、また、或ところでは、

其有得聞 彼仏名号 彼の仏の本願の名号を信すべしと

歡喜踊躍 乃至一念 積尊のとき給うことであるから

必ず浄土に生れさせて頂けること

よと、喜ぶこころのおこるとき、

りを主張して、多念は間違ひであるといふのは、これもまた行き過ぎたことである。

本願の御文に「乃至十念」と誓われているから、一念に限らないということも明らかであるのに、これをもちいずまた『阿彌陀經』に「一日乃至七日名号を称えよ」とあるのも、無駄言とすててしまおうとするのであろうか。この『經』は『無問自說經』と申して、問う人なくして、積尊が御自ら出世の本懷をあらわされた大切な『經』である。

善導大師は之等の『經』をもととせられて『觀經疏』に一心專念

ひとすぢに信じて、他の善、余の仏に心をかけず、

彌陀名号 ただ彌陀仏の御名をとなえて、

行住坐臥 行くも、住まるも、坐るも、臥すも、

不問時節久近 年月の久近も、時間の長短も、問うこと

念念不捨者 もなく、不浄のときもへだてなければ、

是名正定業 かよりの信心をこそ、眞実の浄土へ生れる正しい業因たねいんと名づけられる。

順彼仏願故 それこそ、われら凡夫の迷い心でなく仏の本願にそいまつるゆゑに。

と、定めおかれている。また同疏の『散善義』の文に、誓畢此生無退轉 誓つて此の生涯をおわるまで、すこしも退轉することなく

当知此人 為得大利 このひと願わず知らぬうちに、大の御利益ごりやくをこうむり

則是具足 無上功德 仏の願力の催しにより、求めないのに、必ず無上の功德をことごとく身に得て、自然に仏のさとりをすみやかにひらくであろう。

と、たしかに教えて下さつてゐる。

善導大師は『經』の思召しを頂かれて『往生礼讚』に、

歡喜至一念 一念歡喜するものは、

皆當得生彼 皆まさにかの浄土に生れることが出来る。

とも、更に

十声一声一念等、 十声の念仏者、一声のもの、一念の者も、

定得往生 定めて往生することが出来る。

とも、お定め下さつてゐるのを、それにしたがわなないということほど、浄土の教について、これにまさる①怨敵あだがあるであろうか。

(註一) 歎異抄十二条に「法の魔障なり、仏の怨敵なり

……つつしんでおそるべし、先師の御心にそむ

くことを、かねてあわれむべし彌陀の本願にあ

らざることを」とあることを参照されたし

しかし、こう云うからといつて、ひとえに一念往生ばかり

唯以浄土為期

ただ浄土に生れるまで油断なくつとめよ。

と、教えられて、ひまなく、やすみなく、無間、長時に念仏を修すべしとすめられてゐるのをば、一念義の人達はやあまつたことであるとしてしまふのであろうか。

幸に浄土門に導き入れられながらも、善導大師のねんごるなおしえを破つたり、叛いたりすることは、① 異学・② 別解の人にもまさつた③ 仏の怨敵あだであつて、ながく地獄餓鬼、畜生の三塗の苦海に沈みきつて、浮ぶ瀬もありえない、まことにいたましくあさましいことである。

(註) ① 異学とは聖道門や仏法以外の教に帰して、念

仏以外の行を修し、余の仏を念じて、目のよしあしや、祈りごとや、うらないに心をやつす人々

(註) ② 別解とは念仏しながら自力をたのみぬ人である。自力とは、我が身をたのみ、わが心をたのみ、我が力をはげみ、わが善根をたのみ人である。

(註) ③ 仏の怨敵とは、善導大師の念仏者のしるべとして説かれた水火二河たごえの中で、東岸にあつて念仏者を呼びかえす、異学、異見、別解

別行の人を、東岸の群賤ぐんせんといましめられてゐることによられたもの。

こういふわけであるから、善導大師は『法事讃』の中に次のように述べられている。

上座一形

念仏し始めてから生命終るまで、

下至十念三念五念

十声であれ、三声・五声であれ、

仏来迎

その遍数によらず仏は来り迎え給う

直為弥陀弘誓重

諸仏の出世の本意は、直ちに誓願の

致使凡夫念即生

名号をもちよと重ねて勧め給うて

われら①凡夫の、本願他力を二心なく信ずれば、その一念の時に②不退の位につき、念仏の生涯を終われば浄土に生れて、速に仏のさとりを得しめようと願われている。

(註)

①凡夫というは無明・煩惱われらが身にみちみ

ちて、欲もおおく、瞋り腹立ち、そねみねた

む心多く、ひまなくして、臨終の一念にいた

るまで、とどまらず、きえず、たえずと、水

火二河の譬にあらわれたり。(一多証文)

(註)

②信心のひとは、必ず浄土に生れる身分、即ち

正定聚のくらいにつかしまられ、そして必ず

仏の無上のさとりをひろくことが出来る。

更に『往生礼讃』文に、

今信知弥陀本弘誓願 今、弥陀の弘き御誓いは我等煩惱

も、そのどちらが、本願の思召しにそむいているためであるということをおしはかつてもらいたいものである。

そういうことであるから、よくよく注意して、多念は即ち一念であり、一念はそのまま多念であるという道理を、取り違えてはならないのである。

南無阿弥陀仏

建長七年四月廿三日 愚釈積善信八十三才書写

### 解説

聚墨生

『一念多念分別事』は、隆寛律師の著書であります。その目的は、法然聖人亡きあと、同朋、同学の間の、一念義、多念義の争論を、大聖釈尊と善導大師の、経文と釈文を引用されて、顕正し、破邪せられて、両義のどちらにもかたよつてはならぬとさとされたものであります。

従来、隆寛律師を多念義の人であると見なす人もありますが、律師御自身にはむしろ、一念、多念の偏向を破邪せられた方であることは、本文を一読すれば明白であります。おそらくは、律師の滅後、弟子方の中に、律師の行相を律法的に模倣する者があつて、ために律師の真面目が取り違えられたのであります。

悲しいことであり、私共の脚下を省みさせられるよい鏡であります。然し前号で述べましたように、法然聖人は「我れ亡きあと浄土の法文を直ぐに説く人は、聖寛と隆寛なり」と遺言されて居り又、律師は聖覚法印、親鸞聖人とならんで、法然聖人から「選擇

及称名号下至

十声一声

定得往生

乃至一念無有疑心

とも説かれ、また同じ『往生礼讃』に、

若七日及一日

下至十声

乃至一声一念等

必得往生

とも仰せられている。

かように重ね／＼ねんごろに教えられている。これらの御文によれば、一念でよいとか、多念でなくてはいけななど、あらそうべきでないことはあきらかである。ひとすじに弥陀の本願をすでにたのむ人は、生命のあるうかがり、往生を遂げる時まで、念仏すべしと、お教え下さつていのである。よく／＼注意して、決してかたよつた執着をしてはならないことである。

心の底を思うように云いあらわすことも出事ないが、これだけで貰いたいと思う。

おゝむね、一念に固執している人々や、反対に多念に強硬にかたまつている人達は、かならず臨終が悪いのを見て

集』の伝授をうけて居られます。

親鸞聖人は、律師を聖覚法印と共に、同門の兄弟子として、大先輩として非常に崇敬せられました。後世物語と自力他力事と本書とを、聖人は筆写せられて、関東の同信者へ法の鏡として送つていられることは誰も知るところであります。そればかりでなくその中の難解な漢語を和訓して、在家の無智の者のためにねんごろにお勧め下さつていることを思いあわせまうとき、私共も心をあらたにして御遺訓を拝読申すべきであります。

次にこれは私の愚考することでありませんが、唯信鈔、後世物語自力他力事、一念多念分別事、二河白道の譬、などは、繰り返し関東の同行方に、聖人が晩年にお勧め下さつたもので、歎異抄の著者などはもとより筆写して坐右に常におかれたものと信じられます。

更に、一念義に偏して我心得顔に墮し、或は、多念義に偏して賢善精進型を造つている傾向は、現今の真宗信者の間にも現に沢山見るところであります。否私自身の問題であります。私共はうまれつき、或は保守的、或は進歩的、或は外交的、或は内攻的、等々種々雑多なものを持つて居り、知らず／＼に自己流に偏し、遂には行き詰るものであります。その中で最も大きな傾向に、律法主義と放縱主義があります。言いかえれば多念義と一念義であります。近角先生は「遠慮心と横着心」とくだいて指適して下さいます。

幸に法然、親鸞の両聖の御遠忌をお迎え申した年、永年の願いでありました、聖寛、隆寛の両師の書を意識し、私自身に心読させて頂き、祖聖の御心の一端を拝し得ましたことは、まことに倅せてありました。

# あとがき

暑中御見舞申上げます。八月一杯は齒の治療と瀉疾の静養のため休まして頂きましたが、九月の初秋と共に従前通り日曜講話や法縁を結ばせて頂きます。

○ 本月号は特に恵まれてまして、近角常音先生の忌月号とさせて頂きました。先生の真面目に浴させて頂き、酒飢の身に法潤を恵まれました。執筆下さいました方々に謝しまつると共に御住所を御紹介申します。

北海道芦別市上声別、三菱礦業所ひぐらし住宅

近角 真観  
東京都台東区浅草向柳原町一ノ二六西医院

東 柳瀬 留治  
東京都渋谷区代々木本町七三一短歌草原

○ 七月二日の白井先生の一道庵での御講話は「おもいでと題されて、十一歳の御時御母堂を亡くされて以来、「天なり命なり」の儒教に満足されず、「汝自身を知られ」のソクラテスの訓えに驚かれ、やがて「神は愛なり」の聖書にひかれ、教会の門をくぐられたけれど「さばき」の問題に疑念をおこされ、とうとう「三好愛吉先生の御指示によつて、真宗に帰せられて、近角先生、島地、前田、多田師の御提勘のもとに初めて人生の帰趨を見出されたことどもを厚々として御述懐下さいました。

特に菅瀬芳英師・

「如來所以興出世、唯說弥陀本願海。」とあり。吾等の出世は何の為なのか、人生の究意の目的は何か。其は、唯聽弥陀本願海に在り。如何に學問を究むるとも弥陀の本願を聞くことなければ何の詮もなし。本願を聞き念仏申せばすべての學問が生きてくる。何よりも先ず本願を聞くべし」  
の數語が五十年後の今日、いよ／＼心にみるものがあるとも申されました。

又、近角先生は御生涯を貫いて、同じことを繰り返して繰り返して、しかも其度毎にあたりしい心で生々と御話し下さつたことの尊さを讃仰され、その例として、白井先生が京城大学に居られた頃、それは東京を去つて三十年も経つた日、神戸大学の井上善右衛門様が、一度近角先生の御教をうけたいと東京にお伺いされた時、どういふお話でしたかとたずねると「姥捨山の話、炎書地への陛下の御見舞、お粥の念仏、……」等で、繰り返して聴聞されたものと同じ譬であつたのに更に驚嘆せられた由であります然もそのお話振りが、「たきさても御飯の味わい」の如きであつたと井上様も感嘆されたことでもあります。生命がけの御体験を繰り返し／＼お説きになつても、なお尽きないものがおありになつたので、それが真実の声でありましょう。と。

## 御案内

御案内九月から第一、二、三日曜午後一時半、講話、廿四日午前午後昭和区小椋町教西寺の法話を続けます。

一条の綱より外は頼みなし  
千尋の崖に落つる我身は

読 人 不 知

定 価 一 部	二 十 五 円 (送 共)
半 年	百 五 十 円 (送 共)
一 年	三 百 円 (送 共)
編 集 ・ 発 行 人	花 田 正 夫
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 〇 八 八	
印 刷 人	本 田 政 雄
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 〇 八 八	
発 行 所	慈 光 社
振 替 口 座 名 古 屋 一 〇 四 七 〇 番	